

学 位 論 文 題 名

親になるプロセス

学位論文内容の要旨

本論文は、54名の母親を対象に、出産後2年間の心理的变化を追跡したものである。本論文では、時間経過の中で母親たちがさまざまな経験を通して新たな行動＝思考＝感情システムを如何に再構成するのかを、現実知覚＝評価様式とその変化を切り口に記述した。そして、変化の仕組みについての理論的モデルを提起した。

本論文は10章で構成されている。

1章では、この研究プロジェクトをはじめることになった個人的な経緯と研究プロジェクトの概要をまとめた。この研究プロジェクトのサンプルは、54名の母親(平均年齢30.3歳、23～40歳、第1子26名、第2子18名、第3子9名、第4子3名、ただし双生児が2組含まれている)であった。データ収集は、質問紙と面接によるインタビューであった。質問紙調査は、妊娠中に2回、出産後6回(1、3、6、9、12、18、24ヵ月)実施した。インタビューは家庭訪問をおこない、4回(3、6、12、18ヵ月)実施した。1章では、方法論的問題についても議論した。それはおもに、収集された資料の客観性であった。このプロジェクトでは、古典的な意味での客観性を考慮しなかった。収集したのは、研究協力者であった母親たちの主観的で、断片的に報告された体験であった。本論では、彼女たちによって語られた体験が、彼女たちの「本当」の体験であったという保証はないと考えた。むしろ、面接者からの問いかけや面接者が訪れるという契機が、彼女たちにそのような体験を意識化させ、構成させたと考えられるからである。著者は、これを事実の歪曲とも捏造とも考えていない。人間にとっての事実とは、常に他者との関係的文脈において意味をもつと考えられるからである。

2章では、親になるプロセスで母親が経験するさまざまな心理的問題を記述し説明するための理論的枠組みを提起した。まず古典的な2つの説明枠組み、古い個人の歴史の中に問題のルーツがあるという枠組みと現在のストレスによって引き起こされるという枠組みを提示し、その両面を重視する第3の説明枠組みとしてトランザクションモデルを提起した。2節では、トランザクションモデルが、この研究プロジェクトをまとめる上で有効であるという例を紹介した。3節で、より細かい分析の視点あるいは概念的道具として次の3つを提示した。(1)個人の体験にもとづいた価値システムや文化＝社会的価値システム、それに現在の条件、の間の適合／不適合という視点。(2)個人の現実知覚やできごとの評価には、個人的な偏り(現実知覚＝評価様式)があり、その偏り方を知ることが個人の問題を知る上で有効であろうという視点。(3)親になるプロセスを、個人がもつ現実知覚＝評価様式の変化として捉えようという視点。

3章では、出産直後から2年間の心理的变化の概要を、数量的にまとめた。さらに、各調

査時期に測定された抑うつ尺度の得点の変化に着目して、2年間ほぼ安定していたグループ、3ヵ月のときだけ高かったグループ、やや高めの得点を2～3回示したグループ、全体的に高い得点を示したグループに分け、各グループ間で、子どもの頃の経験やストレスの量、夫のサポート量などの比較をおこなったが、各グループ間にはっきりとした違いを見いだすことはできなかった。

4章では、個人の体験にもとづいた価値システムについて検討した。具体的には、幼い子どもの頃の記憶と親としての感情や態度との関係を、事例を用いて検討した。子どもの頃の記憶がネガティブである場合、できごとのポジティブな側面にあまり注目しない傾向があった。これは、子どもの頃の記憶が現実知覚=評価様式と関連していることを示唆している。自分の親が自分に対してとっていた行動を、自らの親としての行動のモデルとしているケースや、それが自らの親としての行動を評価する基準となっているケースを紹介した。

5章では、文化=社会的価値システムについて検討した。親は、子どもの発達についての知識や親として必要な行動や態度についての知識をもっている。その知識は、親が自分自身を評価する基準になるし、行動を方向づける目標にもなる。母親は、あまり育児に協力しない夫に比較して、かなり低い自己評価をしている。母親は、母親としての信念と現実との差を知覚するとき、低い自己評価を与えたと考えられた。

知識はストレス源になることがあることを示した。子どもの発達の問題や遅れも、母親にとって強いストレス源になる。母性神話や母乳神話を受け入れている母親は多く、それも自分に対する低い評価やストレス源になることが示された。

6章では、子どもの誕生にともなうストレスに対する母親のさまざまな反応を事例で検討した。ストレスに対するネガティブな反応を示した場合と、ストレスがあるにもかかわらず、ネガティブな反応を示さなかった場合があった。その違いは、できごとのネガティブな側面とポジティブな側面のどちらに焦点化するかという点にあった。ポジティブな側面に焦点化できるための条件は、個人によってさまざまであった。

7章から9章までは、3つの個別事例を検討し、2章の理論的枠組みで示した3つの視点が有効であることを示した。取り上げた事例は、いずれも他の母親に比べてより深刻な問題を抱え、ネガティブなできごとに焦点化し、ストレスを生み出し、心理的大変さを過大視するような現実知覚=評価様式を長い期間もち続けていた。3人の母親が、ストレスがあっても過剰にネガティブな反応をしなくなるのに、およそ2年間かかった。それは、現実知覚=評価様式が変化するプロセスであった。

10章では、現実知覚=評価様式が変化する仕組みについて議論した。

ネガティブなできごとに焦点化していた現実知覚=評価様式が、ポジティブなできごとを感知し、ネガティブなできごとを知覚してもそれに過剰に反応しなくなるように変化した。そのような変化が起こった仕組みをはっきりさせることはできなかったが、いくつかの仮説を提示した。ポジティブな変化が知覚される条件として、次の3つケースが考えられた。(1) メインの期待や目標が満たされるとき。(2) 周辺の期待や目標が満たされるとき。(3) カタストロフ的できごと。これらのできごとは、母親たちの知覚レンズの方向を変える効果を持ち、自己言及的なトランザクションを通して、現実知覚=評価様式の変化が増幅し定着したと考えられた。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 陳 省 二

副 査 教 授 本 城 秀 次 (名古屋大学)

副 査 助 教 授 石 黒 広 昭

副 査 助 教 授 間 宮 正 幸

学 位 論 文 題 名

親になるプロセス

本論文は、妊娠、出産から母親になる経過において、様々な心理的問題を解決していく過程を、現実知覚＝評価様式の変化とそれによって自分の人生が制御されていく過程として描いたものである。特に強調したのは、女性が育児の中で体験したことで、様々な個人の過去の知覚、記憶や関係とのトランザクションの中で相互にダイナミックに関わりながら変化していく過程である。論文は10章で構成されている。

1章は、問題と本論のデータベースである妊娠後期から子どもが2歳までの追跡研究の概観である。著者は先ず発達心理学において、青年期と中年期の間の20年間についての研究が空白であること、更に親になる過程で一人ひとりの女性の体験を直接記述している研究はほとんどなかったことを指摘し、発達臨床的な観点からこのような実証研究の必要性を強調した。追跡研究は福島市在住の54名の女性を対象として、一人に対して9回以上にわたる長期の追跡インタビューと質問紙による調査を行った。2章では、本研究の理論的枠組みを検討した。これまでの理論は親になる途中に生じる不適応をタイプ1（過去の体験や記憶）とタイプ2（現在のストレス）に分類し説明した。しかし、本研究の対象者が示すパターンから、二つのタイプの何れでもないタイプ3（トランザクション・モデル）を導き出し、親になる過程での心理状態の変化を対象者の現実知覚＝評価様式の変化であるという仮説を立て、その仕組みを解明しようとした。3章は本研究の対象者たちについての追跡調査の結果の概要である。特に出産直後からの感情、ネガティブな感想、育児の不安、ストレス、夫婦関係の変化、産後2年間の抑うつの変化と夫のサポートとの関係について集計し、その結果を分析した。4章、5章と6章は事例及び様々な資料による本論文の理論的枠組みの説明である。4章では、対象者の子どもの頃の両親についての思い出やイメージ、自分自身の感情状態や育児についての感想、母親に対する態度と、母親としての自己評価

との関連を検討した。5章では、母親についての信念と自己評価の関係、子どもの発達についての評価と母親の不安、母性・母乳神話に関連する文化＝社会的価値システムを取り上げた。6章では、子どもの出生に伴って生起する種々のストレスとポジティブ・ネガティブな反応、更にそれに対する子どもの頃の経験や母親としての自己評価との関係を議論している。その上で、このような現実知覚＝評価様式の発達を促進する諸要因（子の特徴、夫や他の家族の理解・協力、本人の現時点での特徴・行動傾向）について実例を用いて分析した。7章、8章と9章は、上述タイプ2を実例を用いて説明した。そこでは、比較的深刻な問題を抱え、ネガティブなできごとに焦点化し、ストレスを生み出し、心理的困難を過大視する傾向のある3ケースを取り上げ、彼女らの現実知覚＝評価様式の変化過程を記述した。10章は理論的まとめとして、現実知覚＝評価様式の仕組みについての仮説を提示した。

本論文は以下の諸点で評価できる。

- (1) 親になる過程をあくまでも個々の親になる人の語りの中から浮かび上がらせた手法を用いて理論的に検討したこと。
- (2) 多数のケースを丹念に追跡し面接した中で、数量的・統計的分析をした。同時に、個々の事例の詳細な分析からリアルに問題の本質を抽出しようとした方法論は、臨床的な立場からも評価できる。
- (3) 過去の知覚・評価が現在の体験に影響を及ぼすだけではなく、現在の結果が後に逆に過去のできごとに対する評価を変えろというトランザクション・モデルを提唱した。これは著者独自の見解である。
- (4) 発達心理学においては、これまで知覚・運動領域において、用いられることが多かったダイナミックシステムズ・アプローチを「語り」の領域で展開しようと試みている。この点に関しては、まだ十分な成果を得たとは言えないが、今後大いに期待できると思われる。

なお、本論文の一部である資料及び分析は既に日本発達心理学会の機関誌である『発達心理学研究』に掲載されている。

以上の内容から、審査員一同は、氏家達夫の学位請求論文「親になるプロセス」が博士論文として適当であると判断する。よって、氏家達夫は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。